

令和7年 第3回能勢町総合教育会議 会議録

1. 開会日時及び場所

日時：令和7年11月27日（木）午後2時30分～

場所：能勢町役場 本館第1会議室

2. 出席者

町長 岡田 正文 教育長 辻 新造 教育長職務代理者 泉 孝英
委員 市村 依子 委員 中澤 安弘

3. 事務局職員出席者

総務部長 藤原 伸祐 総務課長 熊手 俊行 秘書人事担当係長 濱 和也

4. その他出席職員

教育次長 百々 孝之 学校教育総務課長 古畑 まき
学校教育総務課付学校指導担当課長 木寺 明史 生涯学習課長 奥 成久
教育総務担当係長 八木 みゆき

5. 議事の次第

事務局	定刻となりましたので、ただいまより「令和7年 第3回能勢町総合教育会議」を開催します。 本日の会議につきましては、能勢町総合教育会議設置規則第3条の規定により、町長が招集させていただくこととなっております。 開会に当たり、主宰者であります岡田町長からご挨拶を申し上げます。
岡田町長	教育委員の皆様には、教育委員会定例会議に引き続きの会議となりますが、どうぞよろしくお願いいたします。 午前中、町が主催するウォーキング講座に参加するため天王地区に行っておりました。良い天気で4キロ程歩いたのですが、歩くのがこんなに気持ちのいいものかという感想を持ちました。 今年、保健福祉センターに設置しているウォーキング案内看板をリニューアルしました。町が公認するウォーキングコースや注意点を書いておりますので、是非ご覧いただければと思います。 一方で、町内においてもクマの目撃情報が寄せられており、私たちの生活圏に迫っていると感じております。 児童生徒の通学におきましても、非常に気になるところでございます。出会い頭が一番危ないとのことですので、扉を開ける時など、なるべく慎重に行うなど、気をつけていただきたいと思います。 本日は、令和7年3回目の総合教育会議でございますが、忌憚のないご意見をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。
事務局	なお、阪東委員は本日の会議について欠席となっております。

さて、本日は教育施策の現状整理と課題の深掘りについてご協議をいただく予定としております。

古畑課長

資料の確認をさせていただきたいと思います。

教育委員の皆様には、お届けさせていただいた資料について、差し替えがございます。

資料 2 及び資料 4 については、先日お配りした資料と差し替えをお願いしたいと思います。

それから、当日資料として配付させていただいておりますのは資料 3、それから参考資料ということで、カラー 3 枚の資料を付けさせていただいておりますが、これは本日新たにお配りしている資料でございます。

本日は資料 1 から資料 4 及び参考資料が、本日の資料となっておりますので、お手元にご用意のほどよろしくお願いします。

事務局

それではこの先の議事進行に関しましては、能勢町総合教育会議運営要綱第 2 条第 3 項の規定に基づき、議長である岡田町長をお願いいたします。

岡田町長

それでは、次第に基づきまして、議事を進めていきたいと思います。

まず能勢町総合教育会議運営要綱第 5 条の規定に基づき、議事録署名委員を指名させていただきます。

本会議の議事録署名委員につきましては、泉委員と中澤委員にお願いします。

それでは、本日の議事に入る前に、前回 9 月 30 日に開催した第 2 回の会議の協議内容について振り返りをさせていただきたいと思います。

前回の会議では、能勢町教育大綱の改訂に向けた基本的な考え方とスケジュールについて、事務局より説明させていただき、委員の皆様と協議したところです。資料として前回会議の主な論点と確認事項を配付しております。

本日は、これらの認識を共有した上で次期大綱の核となる「現状整理と課題の深掘り」について、より具体的な議論を進めていきたいと考えております。次第にもありますとおり、1 番目が「教育施策の現状整理」2 番目が「教育施策の課題の深掘り」3 番目を「その他」としております。

まず 1 番目の教育施策の現状整理について、教育委員会事務局に説明を求めたいと思いますが、今回はこれまでの取り組みを振り返るため、点検評価結果報告書をベースにした 10 年間の振り返りが指標化され、その推移が可視化されています。また振り返りの総括資料では、重点課題別の評価できる項目と課題項目について整理され、次期教育大綱への提言も示されているところです。それでは事務局よりよろしくお願いします。

百々次長

それでは、「1. 教育施策の現状整理について」教育委員会事務局よりご説明申し上げます。次期教育大綱の策定に向けた基礎資料として、資料 1 は、能勢町教育基本方針に基づき実施している教育施策について、各年度に実施した点検評価結果に用いた指標を平成 28 年度から令和 6 年度までを示

したものです。この指標の推移を基に、過去 10 年間の成果と課題を総括したものが、資料 2 の「平成 28 年度～令和 6 年度 点検評価結果 総括資料」となります。本資料は、次期教育大綱の基本理念および重点施策の検討材料として、特に重要な提言内容を含んでおりますので、ご説明させていただきます。

資料 1 をご覧ください。これは過去 10 年間にわたって振り返った資料となっております。表のとおり、基本方針に示されている重点課題・重点施策、そして具体的な事業名ごとに、各年度の点検評価に用いた指標を一覧表として整理したものです。この資料では、平成 28 年度から令和 6 年度まで 9 年間の推移を示しております。平成 28 年度は能勢ささゆり学園が開校した年であり、この一覧表から、学園開校後の 10 年にわたる教育施策の定着状況や、数値的な変遷を時系列で確認できるかと思えます。主な指標と傾向ですが、資料の冒頭、重点課題「1. 確かな学力の定着と学びの深化」の分野では、英語教育の成果を示す指標として、中学卒業段階での CEFR A1 レベル達成率の推移や、漢字検定合格率など、能勢町独自の特色ある教育の進捗状況を追跡しております。

次に、「2. 豊かな心と健やかな体の育成」の分野では、いじめ認知件数や不登校児童生徒数の状況、体力づくりの取り組みなど、児童生徒の心身の健康状況を示す指標の推移をご覧ください。また、「6～8. 生涯学習・社会教育、芸術文化、スポーツの推進」の分野では、図書室の貸出冊数や利用者数、生涯学習センターの利用者数など、町民の皆様の生涯学習活動やコミュニティ活動の状況を数値で把握できるよう整理しております。この資料 1 で示された、各施策の成果と課題の推移を詳細に分析し、次期教育大綱への提言としてまとめたものが、次の資料 2 の「総括資料」となります。

本資料は、過去 10 年間の指標の年次推移を分析し、「評価できる項目（成果）」と「課題項目（次期大綱への方向性）」に整理したものです。

1. 確かな学力の定着と学びの深化について

評価できる項目として能勢町独自の英語教育推進事業が定着した結果、GTEC を活用した中学卒業段階での CEFR A1 レベル達成率が大幅に向上しています。また、能勢地域学校連携・一貫教育の推進により、12 年間を見通した系統的な教育課程の編成が進んだことも評価できます。課題項目としては、年次推移に変動が見られるため、全ての生徒の学習到達度を安定して高い水準で維持するための指導体制の確立が必要です。さらに、各種調査結果や子どもの実態を、組織的な授業改善や生徒の個別支援に活かす PDCA サイクルをより強固にする必要があると考えております。

2. 豊かな心と健やかな体の育成について

評価できる項目として、いじめ認知件数や不登校児童生徒数について、早期対応・未然防止の意識を常に高く持ち、きめ細かな対応と関係機関との連携を継続してきたことは評価されます。また、体力・運動能力調査では、全国・大阪府平均を意識した取り組みを継続し、地域や外部機関との

連携によるプログラム導入の姿勢も評価できると考えております。

課題項目としてヤングケアラーや多様な性のあり方など、現代的な課題に対する教職員の知識・理解をより深め、児童生徒の心の居場所づくりをさらに充実させる必要があります。また、体力向上の取り組みを単なる測定対策に留めず、生涯にわたって運動に親しむ習慣を定着させるための学校・社会体育を通じた連携強化が必要です。

2 ページをお願いします。6・7・8. 生涯学習・社会教育、芸術文化、スポーツ推進の項目をまとめて評価しています。

評価できる項目として図書室貸出冊数は、一時的な落ち込みから大きく回復し、10 年間で最も高い水準で推移しており、読書活動や生涯学習の推進が町民に定着していることを示しています。また、「20 歳のつどい」の出席率も 80% 台半ばで安定的に推移しており、町として節目を祝う文化が定着していると評価しています。

課題項目として高齢化の進行や多様な学習ニーズに応じた、より参加しやすく、継続しやすい学習機会の提供モデルを再構築する必要があります。さらに、若者が町の教育や文化、まちづくりに主体的に関わる機会を創出し、その活動を支援する仕組みを強化する必要があります。

4・5. 多様な主体との協働、教育環境の整備と運営について

評価できる項目としてコミュニティ・スクールの導入と地域学校協働活動の推進により、多様な主体が学校運営に参画する基盤が築かれました。また、GIGA スクール構想に基づき、児童生徒一人一台端末の整備など、教育のデジタル化の基盤が整いました。

課題項目は、地域との連携強化は不可欠ですが、現場教職員の負担増大を招かないよう、学校運営協議会などの機能強化と教職員の業務改善を両立させる仕組みづくりが必要です。また、整備された ICT 環境や学校施設の老朽化対策など、安全・安心を担保するための教育環境の持続可能な維持管理を計画的に行う必要があります。

3 ページをお願いします。これらの総括結果を踏まえた、次期大綱への提言についてご説明いたします。評価できる項目（成果）としては、能勢町独自の英語教育の成果です。

図書室利用の定着、コミュニティ・スクールの核とした地域連携の基盤整備、そして、ICT 環境の整備 など、過去 10 年間で教育施策の基盤が確立されたことが挙げられます。

課題項目（注力すべき分野）としては、「確かな学力の定着」と「社会を生き抜く力」のバランスの追求「個別最適な学び」と「協働的な学び」を両立させる授業改善「不登校・いじめ」など、子どもの心身の健康に関わる複合的な課題への対応強化「生涯にわたる学びの機会」の創出と、「地域文化・自然」を活かした教育の推進そして、「時代に即した学校運営」の検討と「教職員の働き方改革」の実現 が特に重要となります。

総括といたしまして、次期大綱においては、これらの「定着した成果」を

土台としつつ、特に「個別最適な学びの実現」や「教職員の働き方改革」といった現代的な教育課題に対し、「地域との協働」を最大限に活かすことで、持続可能な教育体制を構築することが求められます。

教育委員会事務局からの「教育施策の現状整理」についての説明は以上です。

岡田町長

事務局より、10年間の多岐にわたる取り組みの振り返り、そして今後の提言について説明いただきました。この資料を踏まえて教育委員の皆様より、この10年間の振り返ってのご意見をいただきたいと思います。

まず一番上の「確かな学力の定着と学びの進化」について、中澤委員はどのようにお考えでしょうか。

中澤委員

現代の子どもにとって絶対必要なのは、ICT教育と英語教育ではないかと思います。これからの時代は、コンピューターが普通に使えて、英語を話すことが普通にできる子どもが必要だと思うので、これが評価できる項目にあることは、本当に素晴らしいと思います。

また、私はこの秋に2回ほど学校に伺って、学習発表会やSDGsフェスタを見学させていただきました。その中で、例えば8年生が職場体験で学んできたことを見学者に対して、「僕はこういうことを学んできました」ということを発表する力が出来ていました。学習発表会でも、1年生の発表を9年生が一生懸命見てくれたり、逆に9年生の少し難しい劇を1年生が一生懸命見てくれたりして、皆が学習発表会を盛り上げようという機運がありました。本当に表現力であるとか、思考であるとか判断力、また人間性といういわゆる生きる力のところでは、ものすごくこの10年間で、前に進んできたのではないかと思います。

その上で英語教育がここまで進んできましたので、あとICTの教育がもう少し欲しいなと思うのが1点です。

それと学力調査について、この資料だけを見ると少し残念な部分もあるのですが、これは、ささゆり学園というより学力調査がない時代から、大阪府の平均値に何とか追いつきたいという気持ちで教えていたことを思うと、ここは昔から継続した課題ではないかと思います。

従って、英語が話せてコンピューターが使えて、発表ができるという、生きる力を醸成しているという意味では、評価されて良いのではないかと思います。

ただ、課題のところに「英語教育だけでなく、学力向上全般における取り組みの選択と集中の検証が必要です」との記載がありますが、本当にこれが大切なことではないかと思ったところです。

岡田町長

我々の時代はICTなんてなかったもので、知らない世代の人が教えないといけないというのは、先生方も大変ではないかと思います。

中澤委員

やはり年配の者からすれば、ちょっと苦手意識がある部分だろうと思いますし、大人と比べたら、子どもたちの方が進んでいる部分も多々あるのではないかと思います。これはやはり研修も含めて大切なことかなと思います。

ます。

岡田町長

ICTに関して、子どもは飲み込みがとても早いです。私はスマートフォンの操作について何回聞いても覚えられず、子どもに教えてもらう方が多いのが実際のところですよ。ありがとうございます。

そうしましたら2つ目の「豊かな心と健やかな体の育成」につきまして、市村委員からご意見をいただけますでしょうか。

市村委員

まず、10年間を振り返るということで資料を作成いただきありがとうございます。単年度での評価結果はこれまで見てきましたが、10年遡って表にまとめた資料は初めて見ました。

評価できる項目としては、能勢の学校の先生は、1人で抱え込み、判断するのではなく、チームで取り組もうとされているイメージがあります。

能勢町は大きな町ではないので、大きな町に比べると、教育と福祉がうまく連携されていて、それが子どもたちの心にも良い影響を与えているのではないのでしょうか。

家庭教育支援員さんが、全部の家庭を巡回していただいている日々の努力もこのような評価に繋がっていると思います。

ヤングケアラーの項目や多様な性に関する課題ですが、これは複雑で大変な問題なので先生方にもより丁寧な対応を求めたいと思います。

チャージングなど、時間をかけながら少しずつ結果が出ていることを考えると、すぐに答えを求めるのではなく、長い目で、いろいろな人が子どもたちのために活動することを続けていくことが大切だと思います。

岡田町長

私達の子どもの時にもヤングケアラーという状況はあったと思いますが、そのような言葉はなかったと思います。我々の時代には体力的な面でも歩いて通える場所が良いと言われており、遠くから通っている方が足が速いとか言われていました。今はバスで通学して体力面も補う必要があり学校としても難しい面もあると感じております。ありがとうございます。続きまして、6番、7番、8番の生涯学習、社会教育、芸術文化スポーツの推進について、ご意見をよろしくお願い致します。

泉委員

4番5番ですが、多様な主体との協働、教育環境の整備と運営について、コミュニティ・スクールの導入と協働体制の構築ですが、地域と連携した教育が基になっていると思いますが、旧校のときには学校との関わりを持っておられた方がたくさんいらっしゃったと思います。

そういう方がこれからも今の学校とうまくコラボレーションというか、協働で色々なことができるような方向へ持っていけたらもっと良くなるのではないかと思います。学校教育以外のところになり、先生方の負担増や働き方改革で難しいところもあると思いますが、地域の方々と連携して、関係性を築くことが必要ではないかと思います。

私の地元の方がクリスマスリースづくりの体験事業に協力しておられ、私も近くで見えておりますが、ちょっとした事柄でも、地域の方と関係性を持ってやっていけば、もっと能勢の学校らしさが生まれ、地域の子どもという感じで育っていくのではないかと思います。

それから教育環境の整備と運営ですが、ICTについては、力を入れている分野だと思います。

児童生徒1人1台の端末があり、今の教科書でも、QRコードがついていて、いろんな動画がすぐに見られるようです。全国の学校を対象とした調査だったのか記憶が定かではありませんが、ICTに関するアンケート結果を新聞で見ました。その結果、ICTが100%良いという学校ばかりではないらしく、それに準じた教え方や違った面から見る必要性についても教えることが大切だと考えておられる先生もいらっしゃるようです。

ICTは世の中の流れであり、教育分野においても必要なアイテムであることは理解していますが、それ一辺倒というのは如何かなという思いもあります。

やはり自分自身で色々なことを経験し答えに到達する力が必要ではないかと思います。昔はICTなど無かったので、辞書を引き、いろんなものを活用して、答えを導き出すというところがあったと思います。

そういうことも忘れてはいけないと思いますので、どこかにそのような趣旨を入れていただけたらと思います。

岡田町長

4番5番の多様性についてもお答えいただきありがとうございます。

私達の頃は成人式には95%程度が参加というのが普通だったと思います。従って、80%の参加で安定的というのは、私達の時代や40年前、50年前と比較すれば、時代が変わったなあと思いますし、この10年の中でも色々と変化があるのだと感じています。

GIGAスクール構想について、今年は端末を入れ替える時期であります。児童生徒用のパソコン、また教員用のパソコンについても5年ごとに更新することになるので、有効に活用いただきたいという思いです。

それでは、最後にこの案件につきまして、当時学校教育課長としても長く関わってこられた、辻教育長からお話をお伺いしたいと思います。

辻教育長

資料3ですけれども、学校の教職員というか、学校現場として10年間をどのように見てきたのか聞き取って、まとめたものが資料3となります。

それと、この10年を振り返る中で、教頭先生にこの間のことを評価していただいたので説明したいと思います。まず資料3の10年間の学校運営について、私も教育委員会で7年、校長として4年携わり、この10年間の振り返りをしました。1つは、1番に挙げている義務教育の一貫性・連続性で、6つの小学校と2つの中学校がそれぞれ1校ずつになり、まずは小学校と中学校としてそれぞれ歩みました。それを6年間続けまして、7年目から義務教育学校に移行し、今年4年目となります。

その経過の中で、子どもたちを9年間で一貫的・連続的に見ていくことが大きなメリットになりました。例えば小学校の先生が中学生もみられた。中学生の先生として小学生も見られたことで、教育に厚みが出ました。能勢町全体の子どもたちを全教職員で対応できる環境ができました。そういう意味では、教職員が能勢で9年間一貫した教育を学ばれたのではないかと考えています。

長年続けてきた小中高一貫教育について、府立高校から分校になってい

った経過も、また豊中高校の分校として能勢に高校を残せたということも、これは再編と同時に大きな良かった点だと思います。もし、能勢に分校が無かったら、能勢にいる子どもたちが、どこにどんなふうにして高校へ通学できたのか考えると、この間、能勢分校が存続し小中高一貫教育が継続できたことも大きな成果ではないかと思っています。

特に、人権教育を基盤としたインクルーシブ教育も成果が出てきました。学校でも教室に行けない子どもの居場所として校内にはステップルームがあり、学校外でもチャージングという教育支援センターがあり、多様な子どもの学びの居場所があるというところでは、「学び直し」の機会を保障する環境が整ってきたと感じています。それから、地域連携のキャリア教育という部分では、再編時、地域の方に不安がありました。地域とともにある学校として新しい学校になったら、地域のことを忘れられるのではないかという不安です。ささゆり学園に行くと、自分たちはあまり関われないのではないかという声が保護者や地域の方からありました。

しかし、田尻でやったことも歌垣でやっていたことも、天王、岐尼や久佐々、東郷でやっていたことも、1つの学校で全員が経験できるようになりました。マラソン大会であれば全員ができる、しめ縄であればその学年の全員ができる。能勢に1つの学校だからこそ、いろんな行政的なサポートや支援もありながら、1つの経験を能勢の子どもが全員できるメリットは大きいと思います。地域とともにある学習をしっかりと積み上げていくことで、いろんな体験を9年間積み上げて、子どもたちが学んでいく形になったことは大きな成果です。職場体験でも、過去は川西市や猪名川町、池田市まで行っていました。しかし事業所を能勢町内に絞って、事業所の協力を得て、生徒たちが選択する形で事業所に受け入れていただき、課題解決型学習として、事業所の課題を聞き取り生徒が提案して、それを実現していくというようなプログラムに、完全に形を変えていきました。この取り組みを通して事業者の方々が、中学生の提案を受けて良かったとか、宣伝方法を変えてみるとか、メニューを開発し商品化し、それをお客さんに売り出す事業所もありました。事業所の方々から色々と支援していただき、子どもたちを温かく見守っていただきました。7年生の防災学習や8年生のインターンシップも地域とともにある学習活動です。どちらかといえば中学校は受験があるので地域に向かう学習展開はなかなか難しいところでしたが、ここ数年で地域とともに学習する基盤が整ってきています。

子どもたちの学力については、点数をとるという学力においては、課題はありますが、生きる力をつけるという意味では、能勢の義務教育学校だからこそ、様々な体験や地域とのつながりの中で、生きる力を育む教育活動が学年ごとに積み上がり、展開することができ能勢独自のキャリア教育として成果があったのではないかと思っています。

あと、忘れてはならないのは、福祉と教育の連携ということで、平成28年度に、大阪府で子どもの生活実態調査があり能勢町も加わったのですが、そのときに、能勢町の子どもたちのしんどさというのが浮き彫りになりました。そこから町では社会福祉士を採用して、子どもたちの実態とか生活の様子を把握するために、福祉と教育の連携が始まりました。また家庭教育支援員「ほっこり」によって、アウトリーチによる訪問で年長から、

小学校6年生までの全戸家庭を年間3回実施されています。

これは全国でも事例が少なく、私が若い頃学校現場にいたときには、直接保護者から学校に悩みやクレームが多かったのですが、この取り組みをしていただいてからは随分ほっこりさんがクッションになっていただきました。「これ福祉につなげたらこんなサービスを受けられるよ」と、家庭訪問したときに、斜めの関係として支援員さんが保護者の困りごとを聞いて支援をしていただくようになりました。つまり学校だけではなく、先生以外の職員がチーム学校として、行政やスクールサポーターなどの専門家の方々が携わり、町からサポートをして、それが継続していることは能勢の大きな資源であると思います。

他市で勤務経験のある教頭先生から、次のようなコメントをいただいています。

「能勢の子どもたちは、いろんな家庭の子どもたちがいるけれども、学力の問題においても能勢の教職員は十分に頑張っており、子どもたちの実態は、最近学習したことは、すぐに理解できるが、時間が経てば忘れてしまうことがあり、家庭学習の習慣の弱さを感じることもある。地域資源として都会には塾がたくさんあり、色々な所で子どもたちは学んでいるけれども、社会資源の乏しさが能勢にはあるので、その点は他市とは違うところです。放課後に子どもを残して指導しようとしても、バスの事情や家庭の事情で難易度が高い。それから、今後、学力が定着するためには、学習できる機会や時間を作り出すこと、能勢の強みである地域との交流や、ICTの活用に取り組んでいますが、その辺を総合的に絡めて、子どもたちの興味・関心にコミットした学習を積み上げていく必要を感じています。保護者の方々もやはり多忙だということで、家で宿題ができず学校で宿題をしたり、スマホやタブレットを使い過ぎて、生活習慣が身についていない子たちもいます。こういう実態の中で教職員も諦めずに丁寧に保護者と子どもたちの成長についてやりとりしている姿もよく見ます。ささゆり学園では、とても温かい関係性が子どもたちに育っていて、不登校だった子どもが能勢に引っ越して来たら登校するようになり、たまに登校した子どもたちにすごく優しく接する雰囲気があります。発達等の課題のある子たちにもすごく優しく接しており、それは教えてすぐにできるものではないと思います。他市であれば学校に出て来れない子がたくさん登校しているのではないかと感じます。不登校の数字は横ばいか微増になっていますが、全国的には激増している状況で、良くここで踏みとどまっていると感じています。」

ということでした。学力の課題はあるものの教職員は丁寧に、子どもたちの将来のために、しっかりやっており、学校現場からも声をいただいている状況ですので、参考にしていただけたらと思います。

岡田町長

教育長から10年間の振り返りということで、具体的なお話をいただきありがとうございます。

確かに私たちの時代は、西中学校と東中学校に分かれていたので、西中学校で育った者は東中学校の生徒を全然知りませんでした。

能勢地域の半分しか交流がなかったというか分かりませんでした。今はひとつになったからこそ、西地域とか東地域に関係なく、町全体のこと

として捉えていただける意味では、ありがたいと思っています。

このような立場になって思ったことでありますけれども、学校教育として、学校の運営は教育委員会が担っている。それとは別に、校門の入口では児童クラブの運営は福祉担当が担っている。

どちらも教育委員会が担当したら良いのではという話を教育長としたのですが、それはやはり、町長部局で担当してもらうことに意味があり、お互いが協力しながらやっていくことが大切であるという話をいただきました。

今は、それが地域や、みんなで子どもを育てるということだと認識しているところです。

この10年間の成果として学校再編時から継続的な課題、そして地域との関わり方や変化について、認識していただけたと思います。それでは、2番目の項目である教育施策の課題の深掘りに移っていきたいと思います。

ここからは、開校後の児童生徒数の推移や、これまでの重点課題、そして今後の教育施策として求められる点など、多岐にわたる資料について、教育委員会の方から、説明いただきたいと思います。これが教育大綱の土台となる、重要な資料になってくるかと思っています。

木寺課長

それでは、資料4-1をご覧ください。

平成28年度から令和7年度にかけて、ささゆり学園の児童生徒数の推移を表した表とグラフになります。真ん中のグラフの点線部分は平成27年3月末時点の見込人数を表しています。

一番下の表は平成28年度から令和7年度にかけての通常学級数及び支援学級数の推移を表しています。

そこから見えることとして、平成29年度以降、前期課程で実人数が見込人数を上回っています。これは、平成29年度以降、出生時点では30人から40人であった児童数が、前期課程入学までに他の自治体からの転入により40人から50人に増加していることが挙げられます。

能勢町の教育環境が子育て世代にとって魅力的な要素となっていることが考えられます。

後期課程に目を移すと平成30年度以降、実人数が見込人数をわずかに上回りながら推移しています。ここからは、前期課程入学前の転入で増加した人数のまま、後期課程進学時に大規模な流出を抑えられ、ささゆり学園に留まる傾向があることを示しています。

今後は、少人数学級の利点を最大限引き出す指導方法の確立及び部活動などの生徒の多岐にわたる教育機会の確保が課題であると感じています。

続いて2ページの下段以降の支援学級の状況についてお話をさせていただきます。

3ページの円グラフをご覧ください。令和7年度で見ると、前期課程・後期課程の支援学級入級児童生徒の約半数が就学前あるいは、前期課程での転入であることが伺えます。

2 ページ上段の表を見ていただきますと、令和 4 年度から令和 5 年度にかけて一度、前期課程において入級児童が減少しています。これは、令和 4 年 4 月の文部科学省通知による適切な学びの場の見直しが影響しております。令和 6 年度に再び前期課程において入級児童数が増加しておりますが、この期間に前期課程において多くの支援学級に係る転入及び入学があったことが表れています。

これらのことから、能勢ささゆり学園の教育環境や取組が子育て世代にとって、「転入の動機」になっていることが考えられます。今後も「選ばれた教育」として、能勢ささゆり学園の強みを積極的に発信し、子育て世代の転入につなげていきたいと考えています。

続きまして資料 4-2 をご覧ください。能勢町における教育と福祉の連携になります。

平成 28 年度に実施した能勢町子どもの生活実態調査報告書からの分析により、経済的資本、人的資本、社会的資本の 3 つの領域において分析がされております。

その中で、困窮層に確実に制度が繋がっていない可能性があることや困窮度が高まるにつれ、おうちの人と一緒に朝食をとる頻度や読書時間、学習理解度が低くなり、学習状況に影響を与えていると推測されるという結果が出ております。また、保護者の相談相手は、困窮度が高まるほど身近に相談相手がいない傾向が見られるという結果も出ております。

この結果を受けて、①切れ目なくつなぐ②教育と福祉の連携③地域とのつながりという「3 つの視点」と、①子どもの生活習慣、学習習慣に対する支援②子どもに対する相談体制、居場所づくりの強化③保護者が子どもに対して関心を高めるための支援④保護者に対する相談体制の整備という「4 つ支援方策」のもと、家庭教育支援事業、SSW・SC 活用事業、子どもの居場所づくり事業、スクリーニング事業を展開しています。

教育と福祉の連携を強化することで、専門的な多職種が関わることができ、多角的な視点からの支援につなぐことで、重篤化するケースを抑えることができています。また、教員が福祉や医療機関等専門的な機関とつながることができることも大きいと感じています。今後も教育と福祉の連携について、しっかりと継続していきたいと考えています。

続きまして資料 4-3 をご覧ください。能勢地域学校連携・一貫教育の取組についてお話をさせていただきます。

能勢地域学校連携・一貫教育の取組は、平成 16 年度に大阪府立能勢高等学校の総合学科への再編と同時にスタートした「能勢地域小中高一貫教育事業」から継続的に行っているものになります。

小中高 12 年間を通して計画的・継続的な教育指導を展開し、基礎学力の充実や生きる力の育成、豊かな自然や能勢町の特性を生かした実践的な学習に取り組んでいます。

令和 7 年度の能勢ささゆり学園と大阪府立豊中高等学校能勢分校との連

携・交流事業は、前期課程においては、能勢分校の体育祭に参加したり、ブドウの栽培・収穫に取り組んでおります。後期課程においては、農業体験会や系列授業体験を実施し、生徒が進学後の姿を具体的にイメージし、進路選択できるようにしています。

また、隔年で実施している SDGs フェスタを今月 14 日に実施し、ささゆり学園全児童生徒及び能勢分校の全生徒、保護者や地域の方に多く参加していただき、児童生徒がいきいきと活動している姿を見ていただけたのではないかと考えております。

古畑課長

地域高 2 留学事業について説明させていただきます。

能勢分校では、令和 3 年度から、町内の一般家庭を下宿先として、3 年間の里山留学事業を実施してまいりました。

しかしながら、3 年間の下宿先家庭の確保が困難なことから令和 5 年度からは、募集停止ということになっています。

一方で、令和 5 年度からは、内閣府の事業採択を受けまして、高校 2 年生の 1 年間だけ、全国各地から留学を受け入れる地域高 2 留学事業に取り組んでいます。

里山留学制度それから地域高 2 留学の受入れの生徒数については、資料に記載の通りです。

8 ページにつきましては、先ほど教育長のお話の中にもありましたが、豊中高校能勢分校の存在意義ということに関しまして、まとめたものを作成いたしましたので、またご確認いただけたらと思います。

資料 4－3 の説明については以上です。

木寺課長

続いて資料 4－4 をお願いします。

4 月に実施されました全国学力・学習状況調査の結果を分析することにより、本町の学力課題が見えてきております。

1 つ目の課題は、学力の定着が挙げられます。本町の児童生徒の解答の特徴を見ておりますと、学習した時期がテスト実施日と近い学習範囲の正答率は全国と同じか、上回っている問題がある一方で、学習した時期がテスト実施日と離れてしまうと、大幅に正答率が下がる傾向があります。この傾向から日頃の先生方との授業の中で、「知識・技能」の獲得はできているが、それが定着につながっていないということが見えてきました。

そこで、今年度より「獲得した知識・技能」を活用できるような授業改善に取り組んでおります。具体的には「問い」に着目した探究的なプログラムを導入し、夏季休業中には全教員で研修を実施しております。10 月から 11 月にかけては 8 年生において探究プログラムを活用した授業実践を実施しております。今後も探究プログラムをうまく活用し、獲得した知識の活用に重点を置いた授業改善を実施していきます。

2 つ目の課題は、読む力です。複数の資料を参照し、解答する問題は多く

出題されていますが、いずれの問題も全国平均を下回っており、解答に必要な資料を探し、情報を結び付けるなどの読む力に課題が見られております。

この課題の克服に向けて、問題を解くために必要な「認知機能」に着目しました。その中でも特に、相手が話すことや書かれている文章を理解したり、自分の意思を文字や言葉にして伝えたりするために必要な「言語能力」について、注力していきたいと考えています。具体的には認知機能、特に言語能力を高めるトレーニングを低学年の段階から積み上げることで、文章を読む力を底上げしていきたいと考えております。

本町の学力層としては、学力が高いとされるA層が少なく、CD層が多いという傾向がここ数年続いています。探究学習と認知能力を高めるトレーニングの2本の大きな柱で児童生徒全体の学力の底上げを図っていききたいと考えています。

児童生徒質問紙の結果からは、ICTの活用頻度、学校以外での学習時間等について課題が見られております。ICTの活用頻度については、昨年度は非常に高い数値が表れていたことに鑑みると、学年等により使用頻度に差があるという課題が見えてきております。

この結果より今年度、OSをchromebookに変更したことをきっかけに、授業支援ソフトを統一し、全教員がICTをより活用しやすいようにしており、活用促進につなげていきたいと考えております。学校以外の学習時間についても、学習ドリルの活用について、より児童生徒が活用しやすいものになるように検討を進めているところであります。ICTの活用頻度が上がることが学校以外の学習時間についての課題克服にもつながると考えております。同時に教員がICT機器を効果的に使いこなすためのスキルを高める研修等についても積極的に実施していきます。

奥課長

それでは引き続き資料4-5の生涯学習課の分野について説明させていただきます。

まず生涯学習課ですが、注力すべき分野として、生涯にわたる学びの機会の創出と地域文化・自然を活かした教育の推進を位置付けて、方向性を見出していこうと考えています。

そしてその取り組むべき方向性としまして、生涯学習課の現状と、生涯学習課という定義を含めて、今後関係人口の創出、ここに主眼を置いて取り組んでいきたいと考えており、生涯学習という言葉の通り、能勢町すべての方が知る機会、学ぶ機会を提供することはもちろんですが、町外の方にも能勢町を知ってもらい、学んでもらうという機会を提供することによって、幅広い範囲の人に能勢町の地域文化と自然の歴史や経過、現状に関心を高めてもらおうと考えています。

この取り組みにつきましては、現在人口減少が進んでいく状況ですので、生涯学習・生涯教育を永続していくにあたっては、近い将来、地域文化や自然教育の人手不足や担い手不足を解消するため、必要不可欠であると考えて取り組んでまいりたいと考えております。その中で主な事例として3つ挙げておりますが、例えば文化財の活用の場合、郷土史研究会の共

催という生涯学習講座につきましては、町外からの関心も高く、参加者数もかなり増えています。

今後は、能勢町に多数ある文化財を観光資源として活用する方向性も視野に入れて取り組んでいこうと考えています。

次に社会体育施設ですが、名月グラウンドの土曜日、日曜日の使用は概ね町外中学生野球チームの使用が占めております。

複数チームが毎月抽選予約するほどですが、これについては、町外の各自治地区においての使用が困難であるということもあり、名月グラウンドの使用が高まっております。

町内で唯一の体育施設ですので、町内の方が当該施設で体力向上や健康増進を目的に継続的にスポーツに取り組むためにも、町外の方が施設を利用され、稼働率の向上に繋がることは必要不可欠です。

一方で伝統行事の推進ですが、各区で実施されている伝統行事、町全体のスポーツ大会というのは近年、町内に限られてる中では参加者が減少しております。また、各部で継続維持に苦慮しているところです。

今後の課題としましては、こういった伝統行事についても学習講座などを通じて、町内外にPRしシビックプライドの醸成とともに、例えばこれまでの亥の子の場合、最近変わってきておりますが、参加は男の子だけというようなルールもありました。そういったルールの緩和等によって町外からの参加も募りながら、新たな体制をとりつつ、伝統を絶やさないように担い手を創出してまいります。

2つ目の新生涯学習センターについては後ほど資料で報告しますが、能勢町内外を問わず能勢町を知る機会の場合、集いの場、憩いの場であることを位置付けて整備を進めていきたいと考えています。その他、当課所管業務におきましても、やはり今後ますます関係人口は切り離すことができない重要な人材資源となると考えております。

裏面につきましては地方創生2.0基本構想より抜粋しておりますが、その中におきましても、関係人口の量的拡大・質的向上を挙げられており、地域との関わり方等に応じて関係人口の類型化を行い、それに応じた施策を展開し、関係人口に対する行政サービスのあり方と、制度面についても検討を行い、必要な措置を講じて、地域住民、関係人口とともに新たな地方創生を進めるというこの構想にも沿った取り組みをしていきたいと考えております。

引き続いて資料4-6 能勢町新生涯学習センター整備について、人口減少、また少子高齢化が進んでいる中で、本町においても課題や影響が及んでいます。教育委員会として、今回の新生涯学習センターは、人口減少が進行するなかにおいても、住民が元気に集える場として、そして町外の方が興味を持ってもらう場所として、図書館法に基づく図書館へと移行する計画を進めています。新たな生涯学習センターのめざす基本理念としましては、学びの深化と生活の質の向上、多世代交流と地域コミュニティの活性化。地域価値の向上と情報発信、この基本理念に基づいて、生涯学習センターを設置しようと考えております。基本方針におきましては、図書館法の目的である住民の学び、文化、社会参加を支える場の実現に向けて、「図書資料サービス機能の充実」「多様な世代交流機能の充実」「住民参加と情報発信」こういったものを基本方針に位置付けて取り組んでまいりた

いと思います。

引き続いて裏面ですが、整備エリアとしては、人口減少が続く本町において、図書館の整備や町の存続を支える未来の投資となる、新たな生涯学習センターは単なる施設整備ではなく、地域の未来を築く場として、持続可能なまちづくりの要と位置付けていこうと考えています。

今後のスケジュールですが、ワークショップを12月から開催し、その後、令和7年度から8年度にかけて基本構想・基本計画の策定、また8年度から9年度にかけて設計業務、基本実施設計、令和10年度に改修工事、そして令和11年度に施設開館というスケジュールを予定しています。

岡田町長

ありがとうございました。ささゆり学園の児童生徒数の推移から、教育と福祉の連携、生涯学習施設整備に至るまで説明がありました。

これらの説明を聞きまして、能勢町が直面する課題の大きさを改めて感じるところです。

特に、児童生徒数の減少の厳しさ、或いは、前回説明させていただいた生涯学習分野における住民の満足度が非常に低いこと。そのデータを踏まえて、生涯学習分野での抽出課題など、次期大綱で取り組むべき喫緊の課題を示唆していると思います。

それでは、たくさんの中身が出てきましたけども、今後あり方がこのままでいいのかとか、新・生涯学習センターの整備を進めておりますが、住民の意見をたくさん聞いて、取り入れてやっていきたいという思いで取り組んでおります。

また、旧役場庁舎の跡地については、憩いの広場として設計ができ上がろうとしております。

そんな中で、事務局からの説明をお聞きいただいたうえで、教育委員の皆様から感想やご意見をお伺いしたいと思います。

中澤委員よろしくお願いします。

中澤委員

1つは前期課程の子どもの数ですが、想定よりも減り方が緩やかになっているというのは本当に成果だと思います。

ささゆり学園をつくるとき、私は久佐々小学校の校長であり、立ち上げ準備委員会には人口増につながる学校にしたいと思って参加しておりました。その当時、町が取り組んでいた事業は、「ささゆり学園」と「火葬場」が大きな事業でした。

しかし、まさか火葬場で人は呼べないだろうということで、何とか学校で人を呼べないかということを考えながら、夜遅くまで準備委員会で話をした思い出があります。

そういう意味では、個人的な感想になりますが、能勢町の人口が減る中で、子どもが増えるというのは本当にありがたいことであると思っています。また、支援学級の子どもたちが増えている。その中で、先生方のスキルを上げなければならないということも、大きな課題があるのではないかと思います。そして、転入された方が満足されるように頑張らないといけないと思いました。

感想になるのですが、福祉との関わりについて、これも本当に素晴らしいことだと思います。地域を挙げて子どもたちを見るということは、他市

にはないものすごく良い取り組みであると思っています。

斜めの関係という言い方をされたと思うのですが、斜めの関係だから言いやすいということもあると思いますので、ものすごくありがたく、頑張っておられる部分だと思います。

学力調査に関しては、先ほども申し上げましたが、定着がなかなか難しいんです。学校に頑張ってくださいと言うしかないのですが、先ほどの説明の中で、色々と手立てを考えているという説明がありましたが、少しでもそのようになっていただきたいと思います。

学力定着の課題は、ずっと昔からあると私は思っています。しかし、実際にこの表を見ると複雑な気持ちになります。上回るまで行かなくても、もう少しと思うのが正直なところです。

それと先生方は非常に頑張っておられて、資料3でしたか、教頭先生が書かれた資料があったのですか、1. 学びの質と自立性に関する課題の一つ目、9年間の連続性は確保された一方で、基礎学力の定着や家庭学習習慣の確立に課題があります。ここは本当に、基礎学力というのは、過去から言われていて、一朝一夕には前に進まないかもしれませんが努力して欲しいと思います。

9年間の連続性については、私が中学校に勤めていたころに、不登校の生徒がいると小学校に当時の様子を聞き取りに行くことがありました。

しかし、1度や2度訪問しても、なかなか深いところまで聞き取れませんでした。今は同じ学校になって、この辺は解消されつつあるのではないかと思います。

ささゆり学園の先生方にも聞いたことがあるのですが、開校当初は先生方の間にも溝があったけれど、それはかなり解消されてきて、今は1つの学校として10年が経過するので、連携というか繋がっているのではないかと思います。従って、この強みを何とか生かして、教育の推進につなげていただきたいと思います。

岡田町長

教育長と話をする中で、人を呼び込める教育に取り組んで欲しいという話をしています。生涯学習施設もそうですが、人を呼び込めるような施設にして欲しいと思っています。いくら良い施設を造っても、誰も来なければ意味がないと思います。

学校としても、転入も含めてたくさん子どもに来て欲しいと思います。今年初めて1年生が1クラスになるので、何とか町費を入れて2クラスにできないかという話も聞いておりますが、町の負担も大きく厳しいので国費や府費を入れて2クラスが実現できるよう要望しています。「ほっこり」についても今回表彰されて、とても素晴らしい事業だと思っています。では、次に市村委員からよろしくお願いします。

市村委員

児童生徒数を示していただき、支援学級の動向も取り出していただきました。支援教育について、ささゆり学園ができる前のそれぞれの学校でも、一人ひとりの子どもを大切に、その子に合った教材を手作りしたり、あたたかい教育をされていました。それが小規模校の良さであり、ご家族の安心であったと思います。学校をひとつにする時、支援学級の子どもたちや保護者にも大きな不安があったと思いますが、それまでと変わらず、ご

家庭との信頼を築くことも含めて、新しい学校でも取り組んでくださり、通級されているお母さんから、「良くしていただき安心しています。」との声を聞きました。当時はまだ、インクルーシブ教育という言葉はあまり聞かず、後に SDGs という言葉が言われ始めた頃から聞くようになりました。誰も取り残さない…そういう考え方で身をもって実践してくださっていると思います。

地域学校連携の取り組みですけれども、平成 16 年から大阪の先頭を切り能勢がモデルになり、他市がやってないことに初めて挑戦する形で先生方も苦労されたと思います。今月 SDGs フェスタを見せていただきましたが、同じ敷地の学校の中に 1 年生から 9 年生までの児童生徒と能勢分校生がいるという風景に感動しました。

他市では見られない取り組みで、良かったと思います。

学力のことで、定着について分析されていますが、読む力のスタミナはすぐにはつきません。小さい時から読書が好きとか本を読むことが楽しいという体験の積み重ねが大切だと思います。

学校の図書室はとても工夫されていて、他の学校に視察に行くたびに、ささゆり学園は図書室の見せ方とか工夫がすごいなと思うぐらい、素晴らしいと思います。

生涯学習センターも新しくされることで、読書とか本も含めて、みんなが関心を持つようになって、住民全員の読書のスタミナがついたら良いなと思いました。

岡田町長

ありがとうございます。インクルーシブ教育という、あまり聞き慣れない言葉なんですけれども、インクルーシブという繋がり、インクルーシブ遊具というのがある、憩いの広場においても取り入れていきたいなという思いで進めておりますので、楽しみにしていただきたいと思います。

また、ささゆり学園の図書室が、そんなに素晴らしいということを、あまり関わりがなかったので知りませんでした。それにも負けられないような図書館を整備していきますので期待していただきたいと思います。

図書館というよりも、図書館を中心にした生涯学習、いろんな方が集える場所というところに力点をおきたいなと思っておりますので、よろしくお願いします。それでは、続いて泉委員からお願いします。

泉委員

初めて知ったことは、この資料 4-2 の教育と福祉の連携のところ、枠の中に書いてある内容は衝撃的で、生活実態調査の分析で、経済的に厳しい状況が子どもたちの教育に与える影響がすごく大きいということに驚きを感じています。

その結果を受けて、3つの視点と4つ支援方法ですが、読ませていただくと、私の個人的な感覚ですけれども、子どもたちの生活習慣や学習習慣というのは、昔なら家でみるもので親やおじいちゃんやおばあちゃんが教えていたと思います。相談や子どもの居場所づくりも家だったと思います。保護者が子どもに対して関心を高めるということについても、どういった関心かわからないですけど、これも親のすることを見て子どもが育つということとか、昔から家の中で親たちが子どもたちに教えるというのか、自然にそれを見て子どもが覚えるみたいなのところだったと思うんですけ

れど、お仕事をされているとの理由から親御さんが家にいないとか、そういうところが一番大きいのかなと思います。

援助制度とか、色々な制度があるのに、全く知らない方もいらっしゃると思いますので、そういう紹介というか手助けしていかれたら良いのかなと思いました。

それと、能勢分校のことなんですが、体育祭とか文化祭にささゆり学園から子どもたちが参加して、色々なことに取り組んでいることは少し前から知っていたのですが、能勢分校もグローバル人材の育成にずっと取り組んでいます。そのような中、つい最近のことですが生徒の1人が農業クラブの全国大会があり、その発表で全国4位に入賞したということがありました。

能勢分校は、この能勢という地域性から農業に力を入れています。養蜂なども色々と力を入れて取り組んでおり、地域と連携した活動という部分でも、少しずつですが取り組を進めています。グローバルの人材の育成ということで、少しずつ取り組みを進めているのですが、周りに見える成果という意味ではなかなか見えないところがあったのではないかと感じるようです。

それと学習の出来不出来というのは中澤委員も言われたように、先生方は本当に日々頑張っておられると思いますし、子どもたちも一生懸命勉強していると思います。

これに取り組んだので、今年はこうなったみたいな答えというのは、早々に出ないと思うんですけども、毎年毎年学習について考えながら、学校、先生、教育委員会で話し合いながら、より良い方法を見つけていければ良いなと思いました。

人間というのは生まれてから老いて死ぬまで、色々な経験というか、やはり人からの影響も人を育てる上で必要であると思います。地域との関係性という部分をやはり大切にしていきたいと思います。

岡田町長

ありがとうございました。

福祉的な面からみても学校給食が重要になっています。本町でも学校給食の無償化に取り組んでいます。財政的な負担はありますが、課題のある家庭が少なくない聞いておりますので、継続していきたいと考えています。

また、能勢分校との連携について、小・中・高の連携という形で新聞に取り上げていただきありがたいことです。今後の能勢分校のあり方について、今の総合学科だけで良いのか、今後どのようにしていくのかということについて、皆様のご意見をお伺いしないといけないのではないかと思います。貴重な意見をたくさんいただきありがとうございます。

それでは、教育長から発言をお願いします。

辻教育長

教育委員さんから様々ご意見をいただきましたが、10年間というのは本当に長かったというのが率直なところですが、でも、色々なことが着実にここまで来たなと思っています。

これからのことを考えたときに、町長が人を呼び込める教育ということを言われましたが、学校現場にいたときには実感として転入生が多いなと

思いました。

今年は1年生が1クラスになってしまいましたが、まだまだやることがあるのではないかという思いもあります。

支援学級の子たちの転入が多いということについて、よく考えたときに能勢町の教育がどういう方向で何を大切にして教育を進めているのかということの事実になっているのかなと思います。

子どもひとり一人を大事にすることを基本に思っている場所が学校なんだということが、伝わっているのではないかと思います。

支援教育では、個別の課題について、それぞれの子どもに対応した支援をしています。学級に支援の必要な子どもがいるときに、それぞれの子どもがどんな課題を持っているかということを踏まえて、教員が考えて授業をする必要があります。つまり、ひとりの子どもの発言を大切にして、集団の中で共有してどの子どもにも発言できるチャンスを与えながら、授業づくりをしていくと教師としての力量が身についていきます。

支援学級を担当することで個別支援の力が付きます。新任であれば10年間のうち2年程度は支援学級の担当をすべきだというのが国の方針になっているくらいです。支援学級でも、通常学級でも基本的には同じだと思っています。インクルーシブ教育でねらうところは、子どもの実態をひとり一人把握することです。今、個別最適な学習で、タブレットを持ってそれぞれが自由進度的にどんどん深掘りで調べていく学習が推奨されています。それは自分が考えたことをどんどん調べて、そこに最終的にはネットの世界だけで終わることも多々あります。しかし、本物体験できることは能勢にたくさんあります。外に出たら川もあり山もあり田んぼもある。本物に出会う機会が多い。自然も歴史も環境も本物が能勢にある。これからも、もう少し能勢の基幹産業である農業や森林とか、そこに目が向くような取り組みについて、もう1歩深掘りできるのではないかなと思っています。5年生はこれまで、地元の方の田んぼでお米を作り、次は藁でしめ縄を作り家にもって帰っていました。今年の5年生は先生方が事前にしめ縄作りを地域の人から学びました。冬休み前には物産センターでしめ縄を売るという学習に発展しています。

売ることが最終目的ではないのですが、自分たちでしめ縄を売れるぐらい力を入れて作成し、米づくり学習の延長には、もう1歩踏み込んで社会参画できることも学びました。5年生で米づくりを学んだ子どもが後期課程で農業に関する仕事とどう出会えるのかということも含めて考えると、インターンシップ先の農業体験に未来の可能性もあると思います。私が学校教育課長をしていた時に、職場（体験先）として、第1次産業に向かう中学生が非常に少ないということについて、議会で質問されたことがありました。子どもたちも能勢の良さに気づきはじめ、第1次産業を体験先として選んでいることは、10年前と大きくは変わったのではないかなと思っています。

今の時代ICTも大事ですから当然それは取り組みながら、地域の基幹産業である森林とか木のこと農業のことや防災についても、大事な学習になります。役場の防災担当職員や消防団の方に来てもらって中学生が避難所を運営する。いざ地震が起きたときに、頼れるのは誰か。昼間は、お父さんもお母さんも仕事で不在だけれども中学生は能勢に居ますから、十分頼

りになる存在になり得ると思います。高校生も町外に出て居ないときに、能勢に居る中学生が防災の中心になる可能性もあると思います。そういう観点から、もっともっと働き手としての中学生というか、その地域の役割を中学生が担うことができます。特に中学3年生になると、判断力も育ち、話す力も育ってきますので、もっとまちづくりの視点で中学生にスポットをあてても良いのかと考えています。

それと、もうひとつの課題は部活動の地域展開です。これはあまり触れられていませんが、部活動のことについては、全国各地、そして大阪府下の町村地域、特に中山間地域の首長さんとか、教育長もとても困っておられます。都会のように、部活動が地域展開できない課題というか、まだ国でも整理できていないので、その整理を待ちながら、12月によりやく次の案が出ると言われてしています。以前から学校再編する時や、地域の部活の外部指導員については、能勢で結構やってきたんです。今も卓球部とかバレー部とか外部指導員がいて、予算をつけながらやっています。先生方の働き方改革を進めながらどのようにしていくのか大きな課題なので、これは国も府も町も、予算措置、働き方改革をどう進めてしていくのかというのは部活動の課題です。保護者の方々もわが子が何年後どうなるんだろうとすごく心配されています。

あと、能勢分校の件では、能勢分校に向かっている大阪府下の子どもがたくさん居るということで、大阪市や堺市から能勢に来たいけれど、交通機関の課題があります。ささゆり学園から3割から4割の生徒が分校に進学し、分校以外は私立・公立で町外の高校に行くとか、最近では通信制の高校も増えているので進路は拡散します。最終的には能勢町で仕事ができるとか、能勢町であっても、何か仕事に就いて生きていけるということを子どもたちが実感しなければ、能勢に残る子は少ないと思います。1度町外に出てから、ふるさとの良さに魅力を感じて帰って来てくれたらいいと思うんです。高校を卒業した子たちが、能勢町でどのように働くのか、能勢でどのように暮らせるかが大きな課題だと思うので、高校卒業後にどのように定住に繋げるかというところを、真剣に考えて施策を打ち出していかなければならないと思います。能勢に住みたいというニーズは随分聞いてますので、住む場所を確保することについては、町長にもお願いしないといけないところだと思います。

岡田町長

ありがとうございます。住むところと働くところについては、大前提として大事なことでと考えています。私の子どもたちの職場体験は町外でしたが、今は地域内で受け入れていただけるということで、地域に理解が増えてきたと有り難く思います。

さて、皆様からいただきました貴重なご意見や事務局が提出した課題点を整理いたしまして、次回、いよいよ次期大綱の核となる教育施策の方針（案）と代表施策の方向性（案）の提示を行っていきたいと思います。

それでは最後の議題になりますその他に移りたいと思います。

事務局から何かありますか。

事務局

事務局より次回総合会議の日程についてご提案を申し上げます。

次回につきましては令和8年1月29日木曜日の午後2時半から総合

会議を開催したいと思います。

一同 了

岡田町長 教育委員会から報告がありますか。

古畑課長 本日、机上に配らせていただきました参考資料について、内容をご説明させていただきたいと思います。

1 枚目は部活動の地域展開の全国的な実施ということです。

先ほど教育長の今後の課題と思われるところにもありましたが、それが書かれたものが文部科学省の資料になっておりますので、またご覧ください。

その裏面につきましては、公立中学校の教職員の働き方に関わることで、法律の改正を受けまして、業務量の管理、それから健康確保措置の実施計画について、時間外在校時間を平均 30 時間程度にすることが求められており、具体策について計画策定することになっていきます。これも今後喫緊の課題となります。

また、この計画につきましては、策定に当たりまして、総合教育会議でご報告させていただくことになりますので、今年度中に報告させていただきたいと思っております。

それから最後の 3 枚目ですが、これは生成 AI の利活用、学校現場における生成 AI の利活用に関するガイドラインの概要を抜き出してお示ししているものです。

先ほどから各委員からもありましたが、先生方より子どもたちの方がデジタルツールについては理解や使うのが早いというところではあります。

生成 AI についても、子どもたちはどんどん使用していますが、うまく活用するための手法を考えていかなければいけないということが示されているところではあります。

教育施策に関わる喫緊の課題ということで、国から示されている 3 点について、参考資料としてお配りさせていただいております。

またご覧いただきたいと思います。以上です。

岡田町長 はい。ありがとうございます。

次回の総合教育会議は 1 月 29 日木曜日の 2 時半からということにさせていただきます。

本日の案件はこれですべて終了になりました。

活発なご意見いただきまして誠にありがとうございます。

以上をもちまして、会議を終了いたします。本日はありがとうございました。

(閉会 午後 4 時 14 分)

上記は、会議の経過（要旨）を記したものであり、これを証するためここに署名する。

委 員 中澤 安弘
委 員 泉 孝英